

# 駒の館だより

明治鍼灸大学図書館報

第 4 号

昭和60年3月30日 発行

明治鍼灸大学附属図書館

〒629-03 京都府船井郡日吉町  
TEL. 07717-2-1181(代)

## マクロとミクロ



マクロ macro-とミクロ micro-とは相反する意味を示す結合辞（或は接頭語とも言う）で、前者は「長・大」を、後者は「微・小」の意を現わすものである。マクロの他に「大」を示すメガ mega-、メガロ megal-なる結合辞もあり、距離の大なる事を示す結合辞としてtele-がある。「大」を意味する結合辞が「小」を示すものより多くあるのは「大」なる事象の表現、観察等に多様化、多極化が存在する為であろうか。（尚メガには百万倍の意もある）

micro-, macro-, megal-, tele-等の結合辞をもった語を以下若干求めると共に、日常みなれない難しい医学用語には※を附して簡単な説明を加えておこう。

microcosm	小宇宙
microcephale	小頭人（症）
microphone	マイクロフォン
microscope	顕微鏡
microscopic	微視的、顕微鏡的
microbus	マイクロバス
microwave	極超短波
microglia	小膠細胞※ <sup>1</sup>
macrocosm	大宇宙
macrocephale	巨頭人（症）
macroscopic	巨視的、肉眼的
macrophage	巨食球（巨食細胞）※ <sup>2</sup>
megaton	メガトン
megaphone	メガフォン
megakaryocyte	巨核細胞※ <sup>3</sup>

図書館長 武 田 創

megascopic	巨視的、肉眼的
megawatt	百万ワット
megacurie	百万キュリー
megalopolis	巨大都市
megalomania	巨大妄想狂
telescope	望遠鏡
telephone	電話

- ※1. 中胚葉性の神経膠細胞で、脳髄や脊髄に侵入した微生物や異物を貪食して無害とする細胞
- ※2. 食作用を有する遊走細胞で、組織球、単球が之に属する
- ※3. 血液の凝固に関与する血小板を産生する細胞

さて結合辞である macro-, micro-を単に「macro」「micro」として屢々使用される場合があるが、前者は一般的、総論的、全体的、後者は各論的、個別的と解釈されてよい。

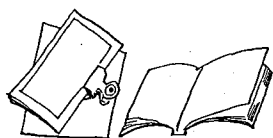
図書館を「macro」及び「micro」の見地から眺めると macro は図書館の建物、設備、機構、運営等で創設期にその基本的なものは一応整備されるべきものであり、micro は年月の推移と共に進行するもので、図書館の特色が醸成されることとなる。殊にこの事は鍼灸学士の養成と鍼灸学の高度の研究の遂行機関である本学に於ける附属図書館の指向すべきものであると思う。此の観点より年間の図書館経費は macro を縦、micro を主とし、micro 的なものにその比重は傾斜されるべきではないかと思う。

具体的に、①macro 的なものとして緊急に要求したい事は、狭い研究室の補完、書籍・文献の散逸防止等の為、1 個室に机、椅子、照明室、具を設置した約 1 坪の個室を 3～5 室、図書館内に設置し、教職員、専攻科学生に限り 1～10 日、20 冊以内の書籍文献を図書館より借出し、持込み得るようにする事。micro 的には、②東洋医学に関する内外、古今の書籍文献を優先的に収集するよう努力する事。③集積された文献、殊

に研究論文のカード化等、近代化を早急に実施し、研究論文の抽出の容易化をはかるべきである。此の事は派生的に、本学に於て鍼灸研究に関する Annual Review の刊行にもつながるであろう。

以上、新年にみた初夢からは約 3 ヶ月になんなんとする春分の日、初夢をあこれ憶い出しながら筆のまにまに記した次第である。

## 本を買うなら、安くて、うすくて、 内容のあるものを探す



東洋医学臨床教室 北 出 利 勝

### 本をうまく買う秘訣

わたしは、役に立ちそうな本なら鍼灸関係、医学関係に限らず、何でも買うんですね。とくに、昔は題名に惚れて買ってしまいました。まあ、最近では、本を買う、あるいは本を選ぶときは、6 項目くらいチェックします。

まず、題名、著者を見て興味があれば、「序文」の部分を 2 回くらい読みます。ここで、この本の目的を知ります。つぎに「目次」を見て内容をつかみますね。そして、こんどは本の最後のページの「奥付き（おくづき）」を見ます。ここでわかることは、まず、本の定価が分かりますね。値段が手ごろかどうか。それから出版社がわかります。本は出版社で専門がわかります。たとえば、医学関係なら医学書院などが専門的に立派な本を出版していますし、その道の専門なら内容もしっかりしているだろうと推察できます。

日本では、自分を紹介するときも、かならず「〇〇会社の〇〇です」とか、「営業部長の〇〇です」と言うように、「かたがき」を付けて自己紹介するでしょう。「かたがき」で評価することは決して正しいと思いません。便宜的にはその人の評価、判断材料になっていることは事実です。本も同じだと思うんです。

まあ、そういうところを見て、つぎに第〇版の印刷かを見ると、古い本でも、版を重ねたものなら、よく売れている本、よく読まれている

本、良い本という、一つの目安となると思いますよ。それから今度は、「ページ数」、「宣伝もんく」を見て、そして買うんです。

はたち頃は、立派な装丁の、分厚い本を買っていたんですけど、最近では、ページ数が少ないこと、安いことはいいことだと思うようになりましたね。なぜかという、内容に「無駄」がないし、しかも忙しい、読む側の立場としては、一冊の本を速く読みきることが出来るんですから。それに、このごろは、本の値段もずいぶん高くなりましたから、できるだけ安い方がいいでしょう。

こんなふうにして、今までいろんな本をたくさん買って来ましたから、今度は、自分で本を書いて儲けようと思ったんですがだめですね。本を書くためには、先達の書いた本を読んで、一つのベースメントをつくるわけで、結局、これまで本を買うために費いやした投資分はとも回収できなかったですね。

### 本を読むための本?!

読書のくせにもいろいろありますね。私は、ほとんど「つんどく」ですね。悪いくせなんです。買ったならそれだけで内容まで自分のものにしてしまったと錯覚するんですね。そこで、今頃になって 3～4 年前に買った本を読んだりすることがあります。「医道の日本」から出版

されたものは全部持っていますよ。ほとんど「つんどく」ですけどね。「つんどく」……買って、読まずに積んどいて、いつかは読むつもりでいるわけですがね。しかし、最近では考えを変えました。図書館の本を自分の書棚と思うようにする。だから、どこかの棚にどんな本があるかを頭に入れてしまうほど、図書館へ通う。どうしても自分の所有物としておくべき本だけを自分の金で買う。こんな考えはどうでしょう。

そういえば、「本を読むための本」というのがありますね。たとえば、速読術とか、斜め読み、飛ばし読みなど、本を速く読むための方法ですね。本を速く読むと言えば、アメリカの大統領だったケネディさんは、本を読むのが速かったそうですね。新聞にしても毎朝、発行されている全部の新聞に目を通していたと言うことですし。

記憶しながら読む方法も書いてある。あるいは引用文献として読む方法もあります。

皆さんも、ハウツーもので出ている「読書術」というような本を読んでおくとおもしろいと思いますよ。ぜひ「本を読むための本」をおすすめしたいですね。図書館にはないかもしれませんが、普通の本屋さんに行けば簡単に見つかります。

#### よい本と対話しよう

ほとんどの学生さんは、レポートを書くために図書館を利用するというのが多いと思いますが、レポートのためだけでなく、どのような本を、どのようにして読めば良いのか、よく考えてみて、おおいに図書館を利用されたいかがでしょうか。

良い人物に出合うのも素晴らしいことですし、また、良い書物に出合うのも人生を豊かにすることになります。そのためには、自分の方から出掛けて行くようにしないと、チャンスに恵まれないのでは。

## 「死の中の笑み」を読んで



生理学教室 福田 酔 歩

この頃、学生時代ほど本を読まなくなった。純文学であれ大衆小説であれ、評論、エッセイといったものまで、面白ければ明け方まで読んでいたものだった。とりわけ試験が間近になると、時間を気にしながら読む本は、最高に小気味が良かった。ある作家一筋というよりは、その時々によって読みたい本は変る。ただ深い洞察といつわりのない真実をもった本を読みたいという気持は変わらない。

学生時代に「思想の科学」という雑誌を読んでいた。ある時、医者になったばかりの内科医の書いた「むこうがわの死」というエッセイを読んだ、医者は多くの死に出合う。はじめは悲しみがあ、恐れがあり、またその死に泣いて、死を筆者自らの側にひきよせてとらえていたものを、時間を経るにつれて、仕事として死を見ていく、死は筆者のむこうがわにいつてしまっ

たというものであった。若い医者 of 死を見つめる素直な姿に、さわやかな印象をもった。

数年後、同じ筆者の手になる「死の中の笑み」という本に出合った。この本は、講談社ノンフィクション賞を受賞し、又NHKのテレビドラマの原作ともなった。筆者は鳥取の病院の一般内科医として働いている。この一冊の本は、いろいろな病苦に悩む人とその家族、そして医療人が置かれている現実を筆者が医者になりたての頃からもっている澄んだ目を通して見て、書かれている。医療現場での死を迎えようとする患者、ガンを宣告された患者の苦しみ、悲しみ、看病するものの姿、様々なそして真実の人間が描かれてある。死は日常であり、「むこうがわの死」にともすればなってしまう。医療人が単なる職業人としてでなく、また教科書通りに患者をさばっていくというのではなく、できるだけ

多く、患者とその家族が立ち向っている困難を共有できるならば、そしてそこに信頼関係が生まれてくるならば、日常の中の死も、ただそれだけで終るのではなく、そこに「笑み」さえ生まれてくだろうと静かに語りかけている。

面白いと言い切れる本も多く読んだ。ふりか

えって、私の日常の行動や仕事、他人との関係の仕方等に、何か考えさせられる機会を与え、忘れられない本は少ない。ここで紹介した二つの作品は、その数少ない中のものである。

「死の中の笑み」 徳永 進 著  
ゆるみ出版

## 文献の山と宝探し



生理学教室 川喜田 健 司

大学の研究室に身を置き教育・研究職と名のつく以上避けられない運命にあるとは言うものの、最近の文献ラッシュには正直なところお手上げの状態である。1983年の1年間に発表された医学関係の文献数は、コンピューターによる文献検索の資料では23万件にのぼるということであり、そして、その数は年々増加の一途をたどる事は間違いないところである。このような文献の山を前にして、自分の研究にとって必要な文献を漏れなく見つけ出し、さらに目を通しておくことは、一人の人間にとっては明らかに不可能な仕事になっている。そこで、分厚い二次資料の本をひっくり返すか、眼に止まった文献からの孫引きで済みますか、はたまた他人の仕事には目もくれず我が道を進むという不退転の決意を固めて仕事に没頭するかということになる。しかし、極く平凡な頭脳を持つ身にとっては、苦しい時の神頼みではないにせよ、やはり今流行のコンピューターによる文献検索に依頼せざるを得ないといった心境になるのも自然のなりゆきであろう。

そこでは、電話一本で希望の文献がすぐ手に入ると言う唱い文句になっているが、実際に利用してみると、自分が頭で考え、想像していた文献がなかなか見つからず高い料金に腹を立てるということは日常茶飯事である。この傾向は特に針灸医学の領域において顕著であり、極端な例を挙げれば一つのキーワードでは百件近くあったものが、『針・灸』と言うキーワードと

掛けると0件になってしまう事も時々生じ、現在の文献検索のデータベースの内容そのものに大きな不満が残されている。その理由として挙げられるのは、これまで針灸医学を中心にして分類・細分化されたデータベースが作られていない、この一点に尽きると思われる。

そこで私が望みたいことは、本学の図書館には最近の針灸医学関係の文献についてはかなり充実して集められているので、それらを充分に活用するために図書館においてコンピューターを導入し、針灸医学の為のデータベースを作ることである。本学が日本で唯一の4年制大学として在る以上、日本における針灸医学の発展の原動力として大きな期待が寄せられるのも当然の事であり、その期待に応えるひとつの課題が、針灸医学のためのデータベースを作り上げて、日本のみならず世界中から、針灸の研究をしようと思ったらずまず明治鍼灸大学の図書館に照会して文献探しから始めるのが常識と言われるような図書館になって、針灸研究のメッカならぬ針灸研究のトノタと呼ばれるようになることも、この学問領域の発展に対する大きな貢献になるように思われる。

改めて言うまでもないことであるが、文献の山から自分の興味や仕事に関連したものが首尾よく手に入ったとしても、それは、単なる活字の塊りに過ぎず、そこから研究のヒントやテーマを見つけ出すのは、もはや自分自身の精神的・肉体的労働を抜きにしては始まらない。針灸医

学のデータベースを作ることは、研究をスムーズに行うためのひとつの手段に過ぎず、ただ選別を容易にしてくれるだけのことであり、その中はまさに玉石混交である。下手をすればゴミの山に埋もれて文献公害をなじるだけで終わってしまうことも充分在り得ることなのである。しかし、文献の山の中に宝が埋もれていることも疑う余地のない事実である。その宝を捜し出せるか否かに研究の成否が大きく関わっており、そこには残念ながらコンピューターの威力は通用しない。簡単に言ってしまうれば研究のすべてが宝捜しのようなもので、スコップで砂を掘り返すかわりに文献の山に鉛筆を一本携えて登り、その次に鉛筆を針やピンセットや試験管に持ち

換えて何かを捜し出すことに尽きる。ひたすら汗水流して捜し回わり、その結果として、宝の山に巡り会えることが出来ることを夢見て、毎日毎日正気の沙汰とは思えないことをやり続けているような訳である。

最初に原稿の依頼を受け取った時、自称大学馬術部卒業の身としては「駒の館だより」と言う館報名に感動し、是非とも『馬』の話を書こうと考えていたところ、本学のプロジェクト研究の一環としてどうも文献の山に登ることになりそうに登山用具が欲しくなり、『針灸医学のデータベース』の話に変更したというお粗末でした。

## 西洋図書館小史 (その四)

附属図書館 八木 克彦

(承前)

こゝで、中世後期(14~15世紀)のヨーロッパを眺めてみますと、キリスト教教会内部の勢力争いや腐敗、外部での法王権と皇帝権の闘争から、中世盛期のヨーロッパを纏めていたキリスト教共和国的な法王のリーダーシップ、教会の権威が徐々に衰退し、やがて法王庁はフランス王の庇護を求めてアビニョンへ移り(1309)、その後、教会の大分裂(アビニョンとローマに2人の法王が在位、1378~(1417)を迎えます。

1453年のオスマン・トルコによるコンスタンチノーブルの攻略——東ローマ帝国の滅亡は、キリスト教共和国の東の砦の消失を意味し、当時猖獗を極めた黒死病、英仏間の百年戦争による疲弊と相俟って、楽天主義は幻滅にかわり、人心は厭世感と閉所恐怖症に伴われて、官能主義、犬儒主義、魔法へと傾斜し、時には、過激、暴動へと走りました。

これらの徴候は封建制度の崩壊、絶対君主制の成立に結びつき、最後の半世紀に至って強力な君主国がイギリス、フランス、スペインに出

現します。

さて、15世紀中葉に活版印刷術が発明されてからは、紙の普及とも相俟って図書は大量に、しかも安価に生産されるようになりました。しかし乍ら、写本から印刷本への移行は必ずしもスムーズではなく、なお暫くの間は、修道院の写本事業が継続され、聖職者や貴族、富裕な人々の間では、贅を盡した装釘の手写本を尊重し、印刷本を軽視する風潮が続きました。

例えば、ウルビーノ市の支配者大フェデリゴ(1444~82)は自らの宮殿内に図書館を設け、



ヴェスパジアーノ等の助けを得て広範且系統的な集書に成功し、その蔵書は、ソポクレス、メナンドロス等のギリシャ語の古写本をはじめ、ドマス・アクィナス、ダンテ、ボッカチオ等当代の作家に及んでいますが、活字本を所有することを「恥じた」といわれております。

当時のイタリアは13世紀以来の都市国家間の生存競争が一段落し、ヴェネツィア・フィレンツェの両共和国、ミラノ公国、ナポリ王国、それに法王領の比較的大きな勢力に分れ、貿易と産業によって、巨大な財を築き上げており、古代ギリシャとローマ帝国からの遺産を引継いだ諸都市は、芸術分野にも惜しみなく金を注ぎ込むことが出来ました。

イタリアにおける文芸復興の重要な中心地であったフィレンツェは、当初、コシモ・ド・メディチ（Cosimo de Medici, 1389～1464）が支配していましたが、新興財閥でありメディチ銀行の総帥であったコシモは、同時に文芸の偉大な擁護者であり、彼のもとに集ったニコロー・ニコリ等学者の応援を得て、金に糸目をつけず、各地に代理者を派遣して、数多くの埋れた古典を蒐集し、サン・マルコに立派な個人文庫を作りました。

このメディチ家の文庫は、後にコシモの孫ロレンツォ（Lorenzo, 1449～92）に引継がれて、ますます充実し、彼の死後、その遺志によって、ミケランジェロの設計による大図書館が完成します。大閲覧室は長さ50米、幅12米で、中央通路の両側に夫々44の書見台を並べた中世の伝統の様式を守り、1571年に一般に公開されました。この図書館は、ロレンツォの図書館という意味で、ビブリオテカー・ラウレンツィアーナと呼ばれております。



ばれております。

ヴァチカン図書館がニコラス五世やシクストゥス四世の在位時代に大いに充実したことは以前に述べましたが、この大図書館もルネサンス時代を迎え、内部は当時の優れた芸術家達の手によって装飾され、公開の機運に乗って、ラテン写本部門とギリシャ写本部門とに区別された公開用図書室を設け、また宗教書の写本を次々に作製して各地の教会や修道院に配布、或は貸付けて、この頃にはローマカトリック教会の中央図書館的役割を果たすようになっておりました。

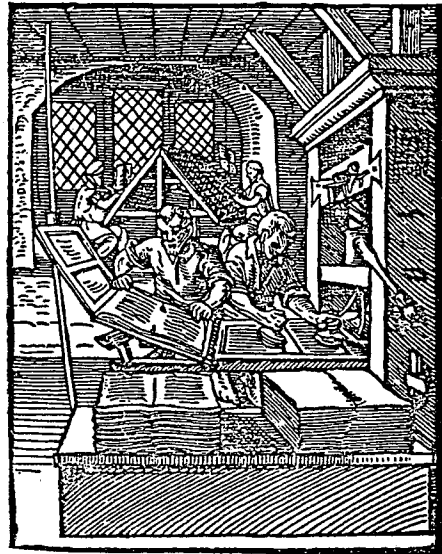
印刷本は15世紀も終りに近くなって、ようやく普及します。

何事にも抜目のなかったヴェネツィアが西欧第一の出版王国になったのは1490年頃であり、1495～97年に全ヨーロッパで1821点の書物が刊行されましたが、そのうち447点がヴェネツィアで出版され、第2位がパリで181点、フィレンツェは40点余りでした。

15世紀中にヨーロッパ各地に設けられた印刷所は、イタリアの70数ヶ所を筆頭に250ヶ所1000軒以上で、その間印刷された図書は約4万種1200万冊と言われておりますが、読み棄られたものなど、多くは滅失・散逸して、現存しているものは極く少数です。

これら現存する15世紀以前の印刷本は、インキュナブラと呼ばれています。incunabla は英語の cradle で、初期・揺籃期を意味し、初期

Incunabula: printing in the 15th century.



刊本と訳されており、大英博物館に約9500種保存され、日本には東洋文庫の5部、東大図書館の4部他約30種位で、世界中でも数が少く、非常に貴重なものとなっております。

活版印刷術の発明は、火薬・羅針盤の発明と並んで、ルネサンス期の三大発明の一つとされていますが、この発明ほど急速且徹底的に知的生活と社会状況の改革に寄与したものはなく、民衆を無知と貧困から解放する上で、極めて大きな役割を果たしました。

イタリアの文芸復興の精神がフランスに普及するのは、フランソワ一世 (François I, 1494~1547) の頃になりますが、フランソワ一世は1534年ブワ城内図書館の蔵書を移して、フォンテンブローに大規模な王室図書館を建設しました。

当初は写本が蔵書の大半を占めていましたが、徐々に印刷本の収蔵が増し、図書印刷の特権を与えることに関連して、図書の検閲と納本制度を施行しました(1537)。これが、今日の納本制度のはじまりで、その後各国に波及します。この王室図書館は1567年頃パリに移り、16世紀末にはキャサリン・ド・メディチ皇后等の貴重な写本類を手に入れて、ますます充実することとなります。

文芸復興の風潮はドイツにも大きな影響を与え、ラテン語、イタリア語の文献を翻訳・出版することによって、人文主義思潮は次第に中産階級に浸透してゆきました。

14世紀末頃には、聖職者、医師、官吏、その他富裕な人々は競って私設の文庫をもつようになっておりましたが、そのうちに各都市には市参事会員図書館 (Aldermanic Libraries) が、

出現し、これらの図書館はやがて公共図書館へ発展します。(1445年創立のニュールンベルグ市立図書館など。)

活版印刷術の普及についても、発明の地元であるドイツでは特に速かであり、エラスムス、フローベンの思想家が古典や人文主義の著作を出版して人心を啓蒙し、また、時の皇帝マキシミアン一世 (Maximilian I 1459~1519) も印刷術の普及に援助を惜しみませんでした。この皇帝は1493年ウィーンに図書館を開設しております。

アウグスチヌス派の修道僧マルチン・ルター (Martin Luther, 1483~1546) が、ローマ法王の免罪符販売を怒ってウィッテンベルグで宗教改革の烽火をあげたのは1517年のことです。彼の公開状は早速印刷業者の手に渡り、数ヶ月のうちに全ヨーロッパに広まりました。

カルヴァン (Calvin)、ツウイングリ (Zwingli)、ノックス (Knox) 等が各自それぞれの教義を掲げ、各国それぞれの利害、民族意識と結びついて、宗教改革の波はヨーロッパ全土を覆います。

宗教改革は、ドイツの農民戦争、フランスのユグノー戦争、のちには1618~48の三十年戦争を伴い、各地の修道院や教会並びに、その附属図書館に壊滅的な打撃を与え、何世紀もの間集積された多くの図書が、「カトリックの書」として破り棄てられ、焼き棄てられました。

こうして中世を代表してきた修道院図書館が衰退し、王侯・貴族の図書館、大学図書館に主役が移り、やがて市民階級を対象とする公共図書館が各地に出現することとなります。

(この項おわり)



近着東洋医学系図書一覽 (和書) (昭和59年1月~12月収蔵分)

傷寒論による漢方と鍼灸の統合診療 小倉重成 創元社 昭58	丹波康頼撰 出版科学総合研究所 昭59
新経穴学 経穴学編集委員会編 自然社 昭57	養生篇 安政原文巻第廿六~廿七 丹波康頼撰 出版科学総合研究所 昭59
基礎から学ぶハリ・漢方療法の実際 謙野俊彦 医道の日本社 昭55	房内篇 現代訳 丹波康頼撰 出版科学総合研究所 昭59
近世漢方医学書集成 102~106、112~116 大塚敬節他 名著出版 昭59	丹波康頼撰 出版科学総合研究所 昭59
近世漢方医学書集成 第4期全16巻総目次 大塚敬節他 編 名著出版 昭59	食養篇 現代訳 丹波康頼撰 出版科学総合研究所 昭59
あん摩・マッサージ・指圧・鍼灸・柔道整復 精選試験問題解答集 芹沢勝助 医道の日本社 昭58	食養篇 安政原文巻第廿九~卅 丹波康頼撰 出版科学総合研究所 昭59
SSPセミナー講演集 第5回、第6回 SSP療法研究会編 SSP療法研究会 昭58	図説東洋医学 湯波編 I 山田光胤他 学習研究社 昭59
瘀血研究 第一回瘀血総合科学研究会講演記録集一 瘀血研究会編 自然社 昭57	排泄の医学と漢方 久保道徳他 三一書房 昭59
図説坐刺針法 角田章 謙光社 昭57	東洋医学古典復刻叢書 1 増補能毒 長沢道寿他 自然社 昭59
新経穴学 経穴学編集委員会編 自然社 昭57	山田業広選集 1. 傷寒論札論、金匱要略札記 北里研究所編 名著出版 昭59
鍼灸に関する基礎的・臨床的研究業績報告論文集 昭和55・56年度 山下久三夫他編 昭58	山田業広選集 2. 金匱要略集注 北里研究所編 名著出版 昭59
中国医学概論 張明澄 医研文庫 昭50	東洋医学大百科 湯波篇・鍼灸篇 サンケイ・グラフ社 昭59
鍼・灸・漢方 かつば随筆 間中喜雄 医道の日本社 昭58	東洋医学大百科 内科篇・外科篇 サンケイ・グラフ社 昭59
初めて読む人のための傷寒論ハンドブック 池田政一 医道の日本社 昭57	東洋医学大百科 雑病篇 サンケイ・グラフ社 昭59
図解簡明針灸脈診法 藤本蓮風 自然社 昭59	経絡治療必携 (臨床ハンドブック付) 城戸勝頼 O.M.R. リサーチ出版部 昭55
東洋医学講座 1. 基礎編 小林三剛 謙光社 昭57	百品考全 山本亡羊 科学書院 昭58
東洋医学講座 2. 肝臓・心臓編 小林三剛 謙光社 昭57	漢方用語大辞典 創医学会学術部編 療原 昭59
東洋医学講座 3. 脾臓・肺臓・腎臓編 小林三剛 謙光社 昭57	足の反射療法 Marquardt 著 吉元昭治他訳 医道の日本社 昭59
靈枢臨床索引集 東京中医研究会他編 国書刊行会 昭57	経絡現象 I 一経絡上に現れた皮膚病変一 李定忠 編者 雄渾社 昭59
金匱要略臨床索引集 東京中医研究会他編 国書刊行会 昭58	慢性病と漢方 (漢方薬医学双書2) 久保道徳他 三一書房 昭59
医法集会 汪昂著 久米崑訳 国書刊行会 昭56	SSP療法 兵頭正義他 SSP療法研究会 昭59
東洋医学講座 7. 病因編 小林三剛 謙光社 昭55	指圧法 全1巻 復刻版 玉井天碧 エンタープライズ 昭54
東洋医学講座 8. 臨床心理編 小林三剛 謙光社 昭55	推拿療法入門 一中国式按摩一 永谷義文 エンタープライズ 昭59
東洋医学講座 9. 診断編 小林三剛 謙光社 昭58	臨床中医学 三沢法蔵訳編 自然社 昭56
東洋医学講座 15. 気学九星編 小林三剛 謙光社 昭56	経絡の発見 一ボンハン学説と針灸医学一 藤原知 創元社 昭52
治験例を主とした針灸治療の実際 上巻・下巻 代田文誌 創元社 昭55	針麻酔の臨床と基礎 池園悦太郎編 克誠堂 昭54
鍼灸学 一経絡局所診療の実際一 岡田勝 医歯薬出版 昭54	あん摩・マッサージの理論と美技 芹澤勝助 医歯薬出版 昭56
中医学基礎 上海中医学院編 神戸中医研究会訳 燎原書店 昭53	アレルギーと漢方 久保道徳他 三一書房 昭59
生体の調節機能 一ハリの原理をさぐる一 高木健太郎 中央論社 昭54	鍼灸診断学 黄志良編著 光和写真印刷所 昭59
医心方 序説篇 現代訳 丹波康頼撰 出版科学総合研究所 昭59	膝痛の鍼灸臨床 松本勅他編著 光和写真印刷所 昭59
医心方 序説篇 安政原文巻第一 丹波康頼撰 出版科学総合研究所 昭59	中医臨床大系 1. 2. 6. 19. 20. 21 北京中医学院他編 雄渾社 昭58
医心方 鍼灸篇 現代訳 丹波康頼撰 出版科学総合研究所 昭59	漢方医学大辞典 1. 2. 北京中医学院編集委員会編 雄渾社 昭58
医心方 鍼灸篇 安政原文巻第二 丹波康頼撰 出版科学総合研究所 昭59	漢方名医のさじ加減 石原明 健友館 昭59
医心方 風病篇 現代訳 丹波康頼撰 出版科学総合研究所 昭59	陰陽六行説の鍼術 宮脇浩志 創医学会 昭54
医心方 風病篇 安政原文巻第三 丹波康頼撰 出版科学総合研究所 昭59	百症賦 解説 高武原著 森田貴美子訳 創医学会 昭51
医心方 養生篇 現代訳 養生篇 現代訳 丹波康頼撰 出版科学総合研究所 昭59	中医内科証治概要 訣論 歐陽鈴著 創医学会学術部訳編 創医学会 昭51
	成人病と漢方 久保道徳他 三一書房 昭59
	食べる漢方大百科 伊澤一男他監 講談社 昭59

あとがき

今年度は教員養成施設用図書の選定・収書の仕事がありました、図書館業務はおかげ様で順調に推移しました。  
本号、またもや年度末のあわただしい中での編集となりましたが、それぞれの先生方から興味深いご投稿を頂き、無事発刊の運びとなりました。ご協力に感謝しております。  
なお、本号のイラストは、1-Aの奥井君に書いてもらいました。(K. Y)